三章　鷲見氏の活躍と功績

― 鷲見家軍忠状と戦歴　鎌倉時代から戦国時代まで ―

軍忠状は、明応の頃に鷲見美作守保重が記したもので、鷲見家譜は、享保の頃に鷲見甚内が記録したものだとされています。書いてある内容は鎌倉時代初めから江戸時代初めまでの鷲見氏の活躍の記録です。

鷲見氏は、藤原氏北家房前の五男左大臣魚名から数えて十二代目の孫、藤原頼保からはじまったといわれています。頼保は、参議藤原家保の八男で永暦元年（一一六〇）に検非違使尉となり、続いて蔵人に進み、中宮大進となりました。

鷲狩伝説には、頼保は天皇の命により鷲退治のため鷲見郷へやってきたと書いてありますが、伝説ですのでそのまま信じるわけにはいきません。鷲狩伝説は、第一章を参照してください。

鷲見郷の近隣には天台宗の長瀧寺があります。養老年間に創建され、六谷六院三〇余りの坊があり一つの大きな勢力となっていました。頼保は長瀧寺内に等覚坊を建て、また、向鷲見村には長瀧寺の末寺、

無元寺（後の長善寺）を建立したと伝わっています。

頼保の長男頸経は京都にいて藤原家を継ぎ、建久六年（一一九五）一〇月備中守に任ぜられました。二番目の子季保は他家に養子に行きました。鷲見郷にやってきたのは三男の重保という人です。重保は寿永元年（一一八二）に検非違使尉に任ぜられましたが、郡上で郡上太郎と名乗り御家人として芥見の庄、鷲見郷を治めていました。

文治元年（一一八五）　源頼朝が守護地頭の任命権を手にしました。建久三年（一一九二）には征夷大将軍となり武士による政治が始まります。

建仁年間（一二〇一～一二〇四）になって、重保のいる芥見庄を武力で奪おうとするものが現れました。美濃国岩瀧郷の小島三郎という人です。この時、鎌倉幕府の執権北条時政からの許可状で、芥見の庄、鷲見郷は重保の所領だという証明をもらいました。

重保は建仁二年（一二〇二）五月に亡くなり、頼保も元久元年（一二〇四）四月に亡くなりました。重保の子家保が地頭としてその所領も引き継ぎ郡上三郎と名乗りました。

家保の時代、鎌倉幕府の源氏の血は絶えましたが、北条氏による執権政治が続いていました。承久三年（一二二一）夏、後鳥羽上皇が朝廷の復権をはかり、北条義時征伐の命令を下

されました。鎌倉幕府と朝廷が戦うこととなったのです。西国の公家と武士は朝廷につき、東国の武士は鎌倉幕府につきました。岐阜県と長野県の間くらいが西軍と東軍の境となりました。鷲見氏は東軍につき、山田庄の山田氏は西軍につきました。結果は東軍の大勝となりました。

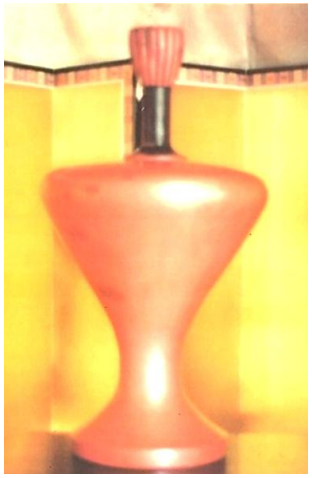
鎌倉幕府は、朝廷に味方した武士の領地を没収して、東側の功績のあった武士たちに守護、地頭を任命し領地を分け与えることとしました。家保は幕府方であったため、芥見庄、鷲見郷の地頭となり領地を保証されました。山田庄の地頭山田氏は西軍についたため所領を取り上げられたのです。

山田庄に新補地頭としてやってきたのが東胤行です。胤行は、下総国香取郡東庄の御家人で、山田庄の新補地頭となり剣村阿千葉城（目城）に居城しました。郡上東氏の始まりです。その後、数百年の間、鷲見氏と行動を共にして各地での戦に赴きました。

郡上三郎家保は、貞永元年（一二三二）五月十二日に亡くなり、その子、保吉、諸保を経て、長保と続きます。弘安八年（一二八五）、長保が大番役を命じられ、京都に上り宮中の警備を勤めることとなりました。長保は祖父家保の名代として六ヶ月の大番役を終わり、更に父保吉、伯父の諸保の名によって三ヶ月の勤務延長がなされました。

大番役とは、武士が上京して宮中を護衛するもので、武士の義務でした。鎌倉幕府になってから、三年の大番役を六ヶ月に縮められましたが、武士の最も重大な義務でした。

鷲見の敬願寺には先祖から伝えられて来た朱塗りの「太平壺」という酒壺（写真）がありました。長保が大番役を勤め、宮中を護衛したことの褒美の品だといわれています。現在この「太平壺」は行方が分からなくなっています。



正安三年（一三〇一）六月五日に長保が亡くなり、藤三郎忠保が後を継ぎました。正和元年（一三一二年）四月、東時常と共に越前穴馬に進出しましたが、時常は討死して兵を引き返しました。しかし、後に鷲見、猪股氏（白鳥町野添の六ッ城主）は越前穴馬まで勢力を広げました。

その後、建武三年(延元元・以下南朝の年号を下に併記)（一三三六）五月、足利尊氏が楠木正成を破り、翌月入京し持明院統光厳天皇を治天の君にし、八月には光厳天皇の弟を光明天皇として押し立てました。また、一一月七日には「建武式目」が制定され、室町幕府が始まりました。

以下は軍忠状(後日の論功恩賞のために武士が自分の軍功を

書き上げて，忠勤を励んだ証拠とした文書）や着到状（その戦に参加したという証明書）として記録された鷲見氏の戦の記録です。（以下「　」の所が軍忠状）

鷲見氏、東氏、遠山氏は土岐氏と態度を共に武家方となり、尾崎宮と堀口、根尾、徳山などの新田一族、伊岐津志、中村、纐纈（可児郡）、猿子（土岐郡）、落合（恵那郡）は天皇方につきました。（地名については22頁に地図があります）

「正慶二年(元弘三)（一三三三）五月八日九日鷲見藤三郎忠保、近江国前山より馬場において合戦し、若党森六郎忠重は討たれ、舎弟七郎重信左肘を射られました」

「同五月二七日鷲見藤三郎忠保合戦に参加」

「建武三年（一三三六）六月二三日鷲見藤三郎忠保合戦に参加したことを、鷲見孫八常良代わって報告します（着到状）」

「同六月二五日　鷲見藤三郎忠保、墨俣において土岐蔵人（頼遠）に属し一四日遠山（近江）で合戦、一六日宇治、一七日一八日一九日西坂本中尾で合戦」

「同七月三日　鷲見藤三郎忠保、二条大宮に向かい、五条大宮竹田にて合戦」

「同八月十日　鷲見藤三郎忠保、一〇日武儀郡関、迫、北野で尾崎の宮と合戦。東常顕、土岐左兵衛蔵人（頼遠）殿代理出雲公とともに合戦」

「同八月　鷲見藤三郎忠保、一三日八代城（今の長良八代）を攻め合戦、一族孫四郎左頸骨射傷、若党弥三郎左足傷、東常顕と土岐左兵衛蔵人（頼遠）殿代理出雲公が証人です」

「同九月二六日　鷲見藤三郎忠保、城田（今の城田寺）に行き肥田殿（土岐氏）に属し、二四日八代城にて城内に攻め込み首ひとつ打ち取る。一族孫三郎右手に傷」

（この肥田殿というは、土岐頼遠の甥で土岐郡肥田に住んでいた肥田氏です）

このように鷲見忠保は東常顕と共に南朝の軍を討伐するのに忙しく戦っていました。

「建武四年(延元二)（一三三七）二月　藤三郎忠保は大野郡で南朝の軍と戦い、大洞（揖斐郡）を焼き、三月一日に谷汲を襲いました」

その頃、根尾、徳山の谷には越前の宮方と通じて南朝方の堀口、根尾、徳山等、新田氏の一族がいたためです。この戦功に

よって忠保は新たに鷲見郷の地頭に任ぜられました。

建武五年(延元三)(一三三八)正月　陸奥国司の北畠顯家が西に上ってきて、二四日に足近河（木曽川）を渡って美濃の国へ入って来ました。この国の南朝方である堀口貞満が根尾、徳山の兵を合わせて千騎余りで根尾谷を出てきてこれに合流しました。守護の土岐頼遠は国中の武家達を集め、自分の手元の兵七百騎余りと共に長森城を出て、後詰めの北朝勢である上杉憲顯、桃井直常と墨俣（大垣市墨俣）で合流しました。この時の東常顯、鷲見忠保の動きを文書に記したものはありませんが、両軍の興廃分かれた時であり、土岐氏と共に北朝方に加勢しました。こうして両軍二八日に青野原で合戦し、顯家が大勝し、桃井及び土岐氏は共に傷つき、頼遠は長森城に退きました。尊氏は、高師直、師泰、細井頼春、佐々木氏頼、同高氏等に顯家が西へ来るのを防がせました。師直等が来て、黒血川に陣取ったので顯家は進むことが出来ず、伊勢へ廻って、大和河内に行き、その年の五月に和泉国、安部郡石津（大阪の南の方）で敗れて死にました。青野ヶ原の戦いには土岐勢は二三騎が残っただけと言います。その奮戦如何ばかりであったか。東氏及び鷲見氏も土岐氏と同様であったことでしょう。

暦応二年(延元四)一三三九）八月　後醍醐天皇が吉野宮で亡くなり皇子の後村上天皇が天皇の位につきました。

康永二年（一三四三）二月七日　鷲見藤三郎忠保が亡くなり、その子の加賀丸が後を継ぎましたが、幼いので忠保の弟藤四郎保憲が後見して数年の間、世の中が少し安らいでいました。

美濃の守護土岐頼遠が亡くなり、甥の土岐頼康が守護職を継ぐこととなりました。

観応元年(正平五)（一三五〇）になって足利尊氏と直義兄弟の仲が悪くなり、土岐氏の方もまた同年七月、その一族の土岐兵庫頭入道周済坊の謀叛があって美濃の国内が動揺しました。そこで足利義詮自ら兵を率いて守護土岐頼康を助けたので、八月にこの乱は納まりました。この年の冬、足利直義は高師直と権力争いをし、兄の尊氏とうまくいかず南朝方について兄に反抗し、師直、師泰を討伐しました。

「観応元年（一三五〇）一一月三日　鷲見藤四郎（保憲）は、高師直、師泰の討伐に参加しました」

「観応二年（一三五一）二月一五日　保憲は兵をだして加茂郡に向かい、高師直の討伐に加わりました」

高師直の居城は同加茂郡の上米田村大字比久見山中に城跡が残っています。翌年二月直義は更に感状を送って保憲をほめたたえました。

土岐頼康は依然として尊氏に従っていましたが、師直が亡くなり、尊氏兄弟が再び仲直りし、直義が幕政を目指したので四

月に土岐頼康等の罪を許し所領を安堵しました。この年の夏、直義は再び義詮と不和になり、鷲見保憲を招き、保憲は直ちに郡上郡内に直義のために戦いました。

「同八月一二日　鷲見忠保の子加賀丸は成長して論人（後の禅峯）と名乗っていました。足利尊氏が手紙を送って加賀丸を招き、高倉禅門（足利直義）を撃たせました」

同八月十八日、尊氏は京都を出発し、直義討伐のため、近江に向かいました。この時、直義が再び手紙を送り、保憲を呼び甚河成圓の軍勢に加えようとしましたが、保憲はその甥の加賀丸が尊氏につき、土岐氏とともに出陣しようとしている時であったので、尊氏には応じなかったと思われます。

「同八月二六日　保憲は甚河成圓方に属します」

「観応三年（一三五二）四月　鷲見加賀丸、三月二六日に愛知県大山寺合戦、二九日には熱田宮口合戦に参戦しました」

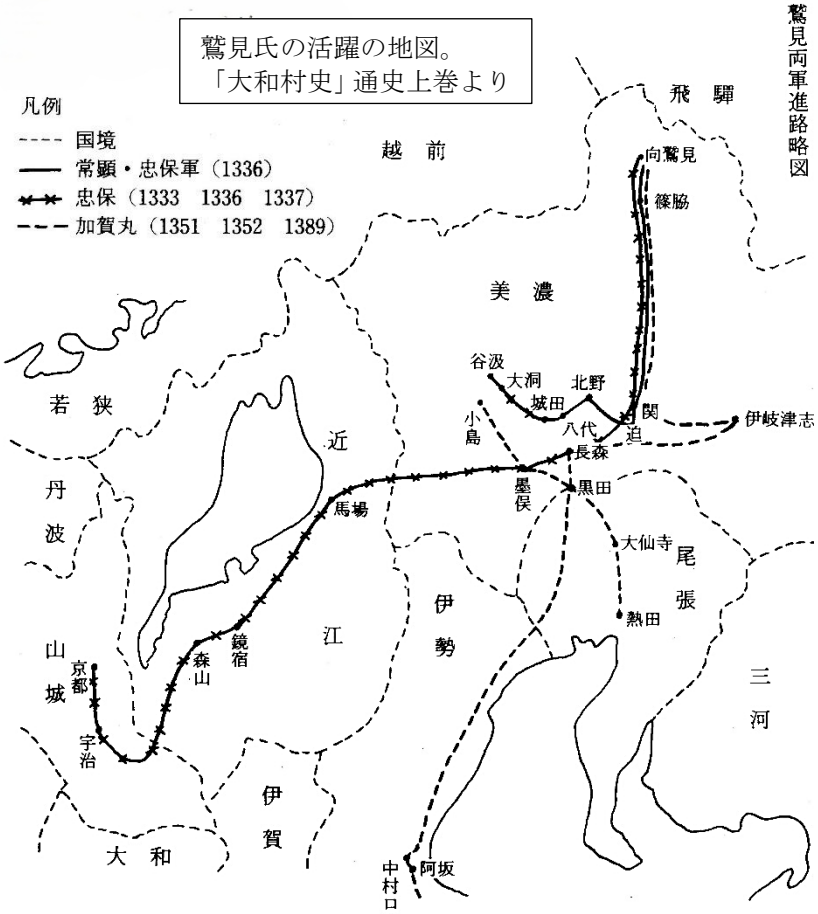
前年九月、直義の仲間達は近江観音寺で敗れて越前に後退しました。

「観応二年（一三五一）九月二一日、鷲見加賀丸達は可児郡伊岐津志城へ攻め込みました。年がかわり三月一〇日、あちこちへ行き敵の建物を焼き払ったりしました。加賀丸は六月一六日、吉良治部太夫（貞家）、石塔頼房、原、蜂谷、宇都宮、参川三郎といった武将たちが長森城へ大勢攻めて来た時に、長森へ向かって闘い、敵を郡戸まで追いかけました」

「文和元年（一三五二）一〇月二三日　鷲見加賀丸、伊勢国に向かった時、阿坂城において中村口の合戦で身命を捨てて働きました」

翌文和二年（正平八）（一三五三）も南朝方は益々優勢で、足利尊氏が鎌倉に向かって攻めている間に、京都は南からの攻撃に遭って、六月、義詮は後光厳天皇（北朝四代）をお連れして

東・鷲見両軍進路略図



鷲見氏の活躍の地図。
「大和村史」通史上巻より

近江に逃れました。土岐頼康は手近な兵、三〇余騎で以って院を池田郡小島頓宮にお迎えし、このことを鎌倉に知らせました。尊氏は九月に西へ帰り、院を守りたてて京都を取り戻しました。こうして南北両軍は十数年も戦って、安らかな日がありませんでした。時の情勢は次第に北朝方に有利となって、北朝勢は吉野に迫り、後村上天皇は南朝の皇居である賀名生にお移りになって、南朝方は弱体化しました。

鷲見藤四郎保憲は、この間、郡上に居て再び出陣はしませんでした。甥の加賀丸の戦の手柄を見て喜び、老後は主に鳥や獣の狩りをして、土地開発に力を尽くしました。郡上郡の東北馬瀬川上流（飛騨国大野郡の一部）にある楢谷は、保憲が開発した処で、その子孫が楢谷寺を新しく建てています。保憲は、応安三年（一三七〇）一〇月二八日に亡くなりました。

康応元年（一三八九）から明徳元年（一三九〇）にかけて、美濃に土岐康行の乱が起って美濃国内は動揺しました。康行は土岐頼雄の子で義行と言っていましたが、守護土岐頼康の養子となって康行と改めました。その後、頼康の実子満貞が生まれて、共に足利義満に仕え、康行は侍所司となり、満貞は将軍に特別に可愛がられたようです。

至徳四年(元中四)（一三八七）一二月に頼康が亡くなったので、康行は尾張、伊勢、美濃の三国の守護を継ぎました。

この時満貞は康行の代官として、京都に居た康行の女婿の直詮が謀反の心ありと申し立てたので、将軍義満はこれを信じて満貞を尾張の守護職に就かせました。直詮は尾張の守護代として長森城にいましたが、これを聞いて大変怒り、翌年（一三八八）五月九日、満貞の兵を尾張黒田に迎え撃ちました。康行は兵を出して直詮をたすけました。将軍義満は、土岐刑部少輔頼世とその子頼益（尾張萱津に住み、萱津氏という）に、土岐康行と直詮を討たせました。両軍、美濃尾張に戦ったけれど勝敗がつかず、幕府は更に斯波義重（満貞の姉婿）佐々木高秀、鷲見禅峯（加賀丸）に頼世を援けさせました。土岐、斯波、佐々木、鷲見の各軍は、川手、長森、小島の三城を攻め、閏三月二五日に遂に小島城にいた康行は出て行き、土岐頼益は美濃守護、斯波義重は尾張守護、一色詮範は伊勢守護となり、義満は土岐氏の勢力を削ぐことに成功しました。

禅峯もまた鷲見郷の地頭職となりました。文書に次のように書かれています。

「明徳元年（一三九〇）閏三月六日　土岐康行退治の件、赴き仰せのとおり働きました。鷲見中務少輔入道」

「明徳二年（一三九一）九月六日　美濃国郡上郡のうち鷲見郷河西河東地頭職の件、鷲見中務少輔入道禅峯相続いたしました」

この動乱の後、美濃には康行の討ち漏らしによって残った残

党が多くいて平和にならず、鷲見郷にも乱すものも多くなって、禅峯は幕府にその処置を依頼しました。翌年六月に管領の細川勝元は、美濃国の守護頼世に文書を送って、その乱を収めさせました。

「明徳三年（一三九二）六月三日　鷲見中務少輔入道禅峯、美濃国郡上内鷲見郷河西河東地頭職のこと、申状をそえました。伊賀十郎時明を禅峯が退けました」

この年の閏一〇月に後亀山天皇は武家たちの要請に従って京都にお帰りになり、三種の神器を後小松天皇に授けられ、南北朝が合一して、ここで長年にわたった騒乱が平定されました。しかし、美濃では相変わらず守護家と康行の残党とのにらみ合いが止みませんでした。応永六年（一三九九）になって大内義弘が叛き（応永の乱）、土岐頼益がその討伐に加わったすきに乗じて土岐直詮は、足利満兼や京極五郎等と通じて守護家に反抗しました。頼益は直ぐに直詮の軍と稲葉郡高桑、長森、川手付近で戦い、これを破りました。直詮は遂に長森城で自害しました。この影響は鷲見郷にも及びましたが、翌年四月幕府は再び、美濃守護に命じ、鷲見郷を争い合う者を退けさせました。

東家は常顯が亡くなり、その子供の中務丞師氏の代で、次の子益之と共に篠脇城に居ました。益之は二日町に城を築き一族の安東三郎に鷲見郷をたびたび襲わせました。

「明徳二年（一三九一）以来東氏の一族がしばしば鷲見郷を圧迫したので、その都度幕府は、美濃の守護に命じてこれを退かせました」

応永一六年（一四〇九）九月になって守護土岐頼益は、鷲見氏の応援のため兵を出して東氏を攻撃しました。土岐氏の軍は二隊に分かれ、一隊は武儀郡金山方面から和良川に沿って中保に進み、他は洲原方面より郡上川に沿って中野川に進出しました。土岐頼益の求めで東氏は、土岐氏及び鷲見氏と和議を結んで事なきを得ました。

応永二一年（一四一四）美濃守護の土岐頼益が亡くなりました。翌二二年伊勢に北畠氏の乱があり、氏保は鎮圧を命ぜられ伊勢に出陣しました。

「応永二二年（一四一五）四月一六日　鷲見中務入道（鷲見氏保）は、北畠少将満雅退治で守護人のもとで活躍いたしました」

応永二四年（一四一七）五月に鷲見禅峯（氏保の父加賀丸）が亡くなりました。東益之は京都で過ごしていたためもあり、郡上は平静でした。

東益之は、嘉吉元年（一四四一）に亡くなり、栗栖城にはその子氏数がいました。

鷲見氏保は文安元年（一四四四）六月に亡くなり、その子、

行保が後を継ぎ鷲見城にいました。

明応三年（一四九四）六月三〇日行保が亡くなって後、三男大学助保兼が城にいました。保兼には跡継ぎの子がなく、美作守保重の子保光が入って城を守りました。

遠藤記（慈恩寺所有）には、天文九年（一五四〇）朝倉義景が郡上に攻め入ったことが書かれています。その翌年東氏は、八幡町赤谷山へ城を移すこととなりました。同年、東氏は阿千葉城を攻め、鷲見貞保は自害しました。このあたりのことについては、不明な点も多いので第五章を参照してください。

天正七年（一五七九）保光が亡くなり、その子孫の多くは岐阜に出て、斉藤氏及び織田氏に仕えたので、鷲見城は保照の孫、鷲見兵庫保直が入って居城していました。鷲見兵庫は、遠藤盛数に従い、その子孫も又、遠藤氏に仕えた者が多くいました。

鷲見兵庫の子鷲見忠佐衛門保義は、遠藤慶隆に仕えて家老職でしたが、天正一六年（一五八八）遠藤氏が加茂郡に移しかえられた時、これに従いました。その後、慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦が始まると慶隆は東軍に応じ、旧領の八幡城を回復させようと稲葉氏との合戦が起こりました。九月三日稲葉貞通は、犬山より帰ってすぐに赤谷山に居た遠藤慶隆の軍を襲いました。忠左衛門等は奮戦しましたが討死し、慶隆等は命からから逃げることが出来ました。その後、寛文の頃、慶隆の孫常友が愛宕山の古戦場に碑を建て、その霊を弔いました。

元禄五年（一六九二）三月に郡上藩主遠藤常久が七歳で死去したため、一旦改易となりました。しかし幕府は遠藤家の功績を認め、白須数馬を義理の伯父である大垣新田藩主戸田氏成の養子にし、さらに遠藤家の転養子とし、常陸下野で一万石を与えました。

八幡町愛宕公園の五人塚

元禄一一年（一六九八）三月、遠藤胤親（白須数馬）は所領を近江に移され三上藩を立藩し初代藩主となります。その時、鷲見氏も遠藤家に仕え三上藩へ移りました。